

発達援助における幼児理解に関する一考察 —近年の研究動向を中心に—

会沢 信彦* 亀田 秀子**

A Study on the Understanding of Infants in Developmental Support: Focusing on Recent Research Trends

Nobuhiko AIZAWA, Hideko KAMEDA

要旨 家庭や地域社会における教育力の低下が指摘される中、子どもの育ちをめぐる環境や親の子育ての変化に対応する力が幼児教育者には求められている。そこで本研究では、近年の我が国における「発達援助における幼児理解」に関する研究動向を把握することで、幼児期における発達援助の在り方について検討した。「発達援助」「幼児理解」「乳幼児」を検索語として論文の検索を行った結果、発達援助における幼児理解に関する論文は、30本が該当した。掲載誌については、学会誌、研究紀要、学会発表論文集の3つに分類した。発達援助における幼児理解に関する研究は、1) 発達援助の専門性に関する研究、2) リスク児・精神遅滞児への発達援助に関する研究、3) 障害児への発達援助に関する研究、4) 広汎性発達障害への発達援助に関する研究、5) 学習障害・ことばの遅れ等への発達援助に関する研究、6) その他の発達援助に関する研究の6カテゴリーに大別することができた。

キーワード: 発達援助 幼児理解 学会誌 研究紀要 学会発表

問題と目的

子どもたちを取り巻く環境は、大きく変化し、家庭や地域社会における教育力の低下が指摘されている現状である。乳幼児期の子育てを取り巻く状況についても様々な課題が指摘されているところである。近年は、少子化や都市化の影響から、家庭や地域において、子どもが人や自然と直接に触れあう経験が少なくなっていると言える。また、地域社会の在り方や家族の在り方が変化するなかで、不安や悩みを抱える保護者が増加している。

したがって、幼稚園や保育所における幼児教育が担う役割がきわめて重要となる。幼児教育は、子ど

もの基本的な生活習慣を確立し、道徳性の芽生えを培うものである。そして、学習意欲や態度の基礎となる好奇心や探究心を育てながら、小学校以降における生きる力の基礎や生涯にわたる人間形成の基礎を培うという重要な役割を担っている。

幼稚園教育要領(文部科学省, 2017)においては、幼稚園教育の基本として、以下の3点を指摘している。

1. 幼児は安定した情緒の下で自己を十分に発揮することにより発達に必要な体験を得ていくものであることを考慮して、幼児の主体的な活動を促し、幼児期にふさわしい生活が展開されるようにすること。
2. 幼児の自発的な活動としての遊びは、心身の調和のとれた発達の基礎を培う重要な学習であるこ

* あいざわ のぶひこ 文教大学教育学部心理教育課程

** かめだ ひでこ 十文字学園女子大学人間生活学部人間福祉学科

とを考慮して、遊びを通しての指導を中心として第2章に示すねらいが総合的に達成されるようにすること。

3. 幼児の発達は、心身の諸側面が相互に関連し合い、多様な経過をたどって成し遂げられていくものであること、また、幼児の生活経験がそれぞれ異なることなどを考慮して、幼児一人一人の特性に応じ、発達の課題に即した指導を行うようにすること。

こうした状況のなか、幼稚園教諭や保育士などの幼児教育者に求められる役割はますます大きくなっている。幼児教育者には、子どもの育ちをめぐる環境や親の子育ての変化に対応する力とともに、幼児の家庭や地域社会における生活の連続性、発達や学びの連続性を保ちながら保育・教育を展開する力が求められている。また、特別な教育的配慮を有する幼児に対応する力も必要である。

ところで、質の高い幼児教育を行うためには、子ども一人ひとりの発達段階を理解した上で総合的な発達援助を行うことが大切である。子どもの発達は、身体的発達、情緒的発達、知的発達、社会性の発達など相互に関連しながら総合的に発達するものだからである。

そこで、本研究では、近年の我が国における「発達援助における幼児理解」に関する文献を抽出することで、その研究動向を把握することを目的とする。それにより、幼児期における発達援助の在り方について検討するとともに、幼児教育の充実に向けた一助としたい。

方法

国立国会図書館（NDL Search）および国立情報学研究所（CiNii）の文献検索システムを用いて、「発達援助＋幼児理解」、「発達援助＋乳幼児」を検索語として検索し、該当する文献を抽出した。

結果と考察

1. 発達援助における幼児理解に関する論文数

発達援助における幼児理解に関する論文は、30本が該当した。掲載誌については、学会誌、研究紀要、学会発表論文集の3つに分類した。なお、発

達援助における幼児理解に関する論文数についてTable 1に示した。

Table 1 発達援助における幼児理解に関する論文数

発行年	学会誌	研究紀要	学会発表論文集	計
1983			1	1
1984		1		1
1987	1			1
1989		1		1
1991		1		1
1992	2	1		3
1993	1			1
1994		2		2
1996	1	1	1	3
1997	1		1	2
1998		1	1	2
1999			4	4
2002	1			1
2005		1		1
2008	1			1
2009		4		4
2018		1		1
計	8	14	8	30

1980年代は4本の論文が該当した。学会誌1本、研究紀要2本、学会発表1本であった。内容は、障害児、発達遅滞乳幼児、学習障害（LD）の疑われる幼児に対する発達援助に関する研究であった。

1990年代は18本の論文が該当した。学会誌5本、研究紀要6本、学会発表7本であった。乳幼児保育の場における発達援助の専門性に関する研究、リスク児・精神遅滞児への発達援助、障害児や学習障害（LD）等への発達援助に関する研究が見られた。

2000年代は8本の論文が該当した。学会誌2本、研究紀要6本であった。自閉症やアスペルガー症候群などの広汎性発達障害に対する発達援助に関する研究が4本該当していることが特徴と言える。その他、障害児やダウン症乳幼児に対する発達援助に関する研究が見られた。

2. 発達援助における幼児理解に関する研究の概要

発達援助における幼児理解に関する研究は、1) 発達援助の専門性に関する研究、2) リスク児・精

発達援助における幼児理解に関する一考察

神遅滞児への発達援助に関する研究, 3) 障害児への発達援助に関する研究, 4) 広汎性発達障害への発達援助に関する研究, 5) 学習障害・ことばの遅れ等への発達援助に関する研究, 6) その他の発達援助に関する研究の6カテゴリーに大別することができた。なお、発達援助における幼児理解に関する論文一覧をTable 2に示した。

Table 2 発達援助における幼児理解に関する研究一覧

発刊年	著者	掲載誌分類	論文タイトル (サブタイトル省略)
1) 発達援助の専門性に関する研究			
1987	岡田	学会誌	乳幼児の行動発達と発達援助
1996	石川・石川	学会発表	発達援助としての絵本の利用
1996	横山	研究紀要	遊びを通しての発達援助
1997	本郷ら	学会発表	乳幼児保育の場における発達援助の専門性
1998	金谷ら	学会発表	乳幼児保育の場における発達援助の専門性
1999	宍戸	学会発表	発達援助のあり方を見直す
1999	刑部	学会発表	保育園における「ちょっと気になる子ども」の参加過程
1999	秦野	学会発表	乳幼児保育における発達援助の専門性
2018	五位塚ら	研究紀要	幼児の発達援助に関する視点に及ぼす臨床心理学的な知識と実践経験の影響
2) リスク児・精神遅滞児への発達援助に関する研究			
1983	清水・山口	学会発表	発達遅滞乳幼児に対する発達援助
1992	本城・幸	学会誌	ハイリスク児の発達援助
1992	山本	学会誌	精神発達遅滞幼児への発達援助
1992	藤井	学会誌	ことばの遅れを主訴とする発達遅滞児の指導
1996	久保・長尾	学会誌	環境的リスク児の早期発見に関する研究
3) 障害児への発達援助に関する研究			
1984	杉田・井出	研究紀要	障害児の発達援助における相互作用的アプローチ
1994	松坂	研究紀要	障害児の発達援助のあり方
1999	武野	学会発表	障害を持つ子どもが複数いるクラスの保育援助
2009	米倉	研究紀要	障害児への発達援助の方法に関する研究
4) 広汎性発達障害への発達援助に関する研究			
1997	海野	学会誌	幼児自閉症児の「視線」発達および発達援助について
2005	尾崎	研究紀要	幼児期における自閉性症状に及ぼす母子支援の有効性
2009	稲田・神尾	研究紀要	幼児期早期のアスペルガー症候群
2009	白瀧	研究紀要	アスペルガー症候群の幼児期
2009	原	研究紀要	アスペルガー症候群のある幼児への療育支援
5) 学習障害・ことばの遅れ等への発達援助に関する研究			
1989	清原・二俣	研究紀要	学習障害 (LD) を疑わせる幼児への発達援助の試み
1993	大橋	学会誌	吃音幼小児に対する発達支援の方法
1994	奥野・北山	研究紀要	情緒的交流に着目した発達援助に関する研究
1998	大崎	研究紀要	ことばに遅れのあるダウン症幼児への発達援助
2002	菊池	学会誌	ダウン症乳幼児に対する運動発達援助の意義と留意点
6) その他の発達援助に関する研究について			
1991	遊佐	研究紀要	発達援助としての親子教室における子どもの変化過程
2008	金城	学会誌	幼児発達援助職を目指す学生に対して「子ども理解」を促す心理劇の試み

(1) 発達援助の専門性に関する研究

発達援助の専門性に関する研究は、学会誌1本、研究紀要2本、学会発表6本の計9本が該当した。

学会誌においては、岡田(1987)による乳幼児の行動発達と発達援助に関する研究が該当した。研究紀要においては、横山(1996)の遊びを通しての発達援助に関する研究、五位塚・山田・古賀(2018)による幼児の発達援助に関する視点に及ぼす臨床心理学的な知識と実践経験の影響に関する研究の2本が該当した。

学会発表は、6本が該当しているが、乳幼児保育における発達援助の専門性に関する研究が3本見られた。発達援助としての絵本の利用に関する研究や発達援助のあり方を見直す研究がなされていた。

五位塚ら(2018)は、発達援助に関する視点の変容に対して、臨床心理学的な知識と実践経験が及ぼす影響について検討している。その結果、子どもの行動の背景理解を通して、知識と実践経験によっては不適切に見える子どもの行動に発達の意味を見出す姿勢が獲得されることを明らかにしている。また、学習的な知識については、子どもの行動を発達段階から理解することの重要性が示唆されたと報告している。この知見は、発達援助における幼児理解を深める上で重要な視点になりうると考えられる。

(2) リスク児・精神遅滞児への発達援助に関する研究

リスク児・精神遅滞児への発達援助に関する研究は、学会誌3本、研究紀要1本、学会発表1本の計5本が該当した。

学会誌においては、ハイリスク児の発達援助(本城・幸, 1992)や環境的リスク児の早期発見(久保・長尾, 1996)に関する研究、ことばの遅れのある発達遅滞児の指導(藤井, 1992)に関する研究が該当した。研究紀要は、山本(1992)による精神発達遅滞幼児への発達援助に関する研究であった。

1990年代前半において、「リスク児」、「精神発達遅滞幼児」や「発達遅滞児」の用語が多く使用されていたことが分かる。「精神遅滞」は、一般的には医学上の用語として用いられているが、学校教育法上の用語としては「知的障害」を用いる形で使っている流れが見られた。

久保ら(1996)の研究では、乳幼児の発達援助のために、環境的リスクと発達のリスクの両面から子どもを評価する必要性を指摘している。日本版家庭環境評価法(JHSQ)による早期の評価とそれに基づく環境の改善が、発達障害による問題発生の予防になりうる可能性を示唆している。さらに、幼児期初期の子どもの発達に影響する環境的リスク要因として、家庭環境刺激や親の職業などの要因が関与していることを明らかにしている。このことは、早期介入により家庭環境の質の改善を行うことが、子どもの発達を保障する保護的要因を強化するという可能性を示唆する重要な知見であると考えられる。

(3) 障害児への発達援助に関する研究

障害児への発達援助に関する研究は、研究紀要3本、学会発表1本の計4本が該当した。

研究紀要においては、障害児の発達援助における相互作用的アプローチ(杉田・井出, 1984)に関する研究や、障害児に対する発達援助のあり方や方法に関する研究が見られた。

発達援助のあり方や方法に関する研究が多く見られたことから、今後、障害児に対する発達援助についての理解がいつそう進むものと期待される。

(4) 広汎性発達障害への発達援助に関する研究

広汎性発達障害への発達援助に関する研究は、学会誌1本、研究紀要4本の計5本が該当した。

学会誌は、海野(1997)による幼児自閉症の「視線」発達および発達援助に関する研究が該当した。研究紀要は、4本が該当しており、自閉症に関する研究として、尾崎(2005)による母子支援が幼児期における自閉性症状の改善に及ぼす影響に関する研究が存在した。アスペルガー症候群に関する研究は3本あり、アスペルガー症候群の幼児に対する療育支援に関する研究が見られた。

幼稚園や保育所においては、発達障害のある幼児への援助について、多くの幼稚園教諭や保育士が苦慮していることが指摘されている。これらの研究から、発達障害のある幼児理解についての知見がよりいっそう深まることを期待したい。

(5) 学習障害・ことばの遅れ等への発達援助に関する研究

学習障害・ことばの遅れ等への発達援助に関する

研究は、学会誌3本、研究紀要2本の計5本が該当した。

学会誌は、大橋（1993）の吃音幼小児に対する発達支援の方法に関する研究、菊池（2002）のダウン症乳幼児に対する運動発達援助の意義に関する研究が該当した。研究紀要においては、3本が該当しており、学習障害（LD）を疑わせる幼児への発達援助の試みやことばに遅れのあるダウン症幼児への発達援助に関する研究であった。

大橋（1993）によれば、発話流暢性は、幼児期におけることばの発達のなかで獲得され、その自律性が確立すると報告されている。また、吃音の問題については、発達の視点からとらえることが重要であり、早期に必要な流暢性の発達援助を得られずにきたことを指摘している。“治す”という観点ではなく、子どもの今もっている流暢性を伸ばし確かなものにしていくという発達援助によって、間接的に、しかも自然に消失することの可能性を示唆している。発達の視点のとらえ直しと発達援助という視点は、幼児教育の実践において大いに参考になると考えられる。

（6）その他の発達援助に関する研究

その他の発達援助に関する研究は、学会誌1本、研究紀要1本の計2本が該当した。

学会誌は、幼児発達援助職を目指す学生に対する「子ども理解」を促す心理劇の試み（金城、2008）に関する研究が該当した。研究紀要は、発達援助としての親子教室における子どもの変化過程（遊佐、1991）に関する研究が該当した。

全体的な傾向として、発達援助における幼児理解に関する論文30本のうち、「障害児への発達援助に関する研究」4本、「広汎性発達障害への発達援助に関する研究」5本、「学習障害・ことばの遅れ等への発達援助に関する研究」5本と、障害のある幼児に関する研究が多くなされていることが分かった。これらの知見から、幼児教育者は、改めて発達障害をはじめとする障害のある幼児についての理解を深めることが重要であると言えるだろう。

総合考察：乳幼児期の発達の特性と発達援助の在り方
子どもは様々な環境との相互作用により発達して

いく。子どもの発達には、子どものそれまでの体験を土台に、環境に働きかけ、環境との相互作用を通して、豊かな心情や意欲及び態度を身につけながら、新たな能力を獲得していくと言える。

子どもを理解するうえで2つの発達の視点をもつことが大切である。1つ目は、発達は時間的経過のなかで展開されていくという視点である。過去・現在・未来という視点から子どもを理解するためにも、幼児教育者には人間の発達のプロセスの理解が基礎的な知識として必要となる。

2つ目は、子どもの発達は環境との相互作用のなかで、他者との関係のなかでなされていくという視点である。子どもを理解するためには、様々な関係性のなかでの子どもの姿を捉えることが必要となる。

人間の発達には個人差はあるものの、それぞれの年齢に応じた発達の特徴や発達のプロセスがある。乳幼児期の発達のプロセスには、まず、能動的な存在としての誕生における、外界との出会いがあり、人との出会いがある。次に、人とのかかわりとしての愛着の形成が重要になる。子ども同士のかかわりによる対人関係や社会性の発達も必要である。続いて、認知の発達として、物の認知、心の理解が進んでいく。さらに、自己形成として、自己意識の芽生え、自己意識の高まりと自己調整能力、自己理解に至るプロセスが存在する。

乳幼児期は、長いライフステージの最初の時期であり、発達の可塑性に富んだ時期とも言える。そのため、発達援助は子どもの育ちをベースにした子育て支援と発達の特性に応じた専門的な援助が求められる。幼児教育においては、心身の発達を基礎にして一人ひとりの特性を把握することが何よりも重要となるのである。

今後の課題

幼稚園教育要領（文部科学省、2017）においては、「幼稚園教育において育みたい資質・能力」として、以下の3つを挙げている。

1. 豊かな体験を通して、感じたり、気付いたり、分かたり、できるようになったりする「知識及び技能の基礎」

2. 気付いたことや、できるようになったことなどを
使い、考えたり、試したり、工夫したり、表現
したりする「思考力、判断力、表現力等の基礎」
3. 心情、意欲、態度が育つ中で、よりよい生活を
営もうとする「学びに向かう力、人間性等」
さらに、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」
として、以下の10項目を指摘している。

- ① 健康な心と体
- ② 自立心
- ③ 協同性
- ④ 道徳心・規範意識の芽生え
- ⑤ 社会生活との関わり
- ⑥ 思考力の芽生え
- ⑦ 自然との関わり・生命尊重
- ⑧ 数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚
- ⑨ 言葉による伝え合い
- ⑩ 豊かな感性と表現

幼児期は、とりわけ子どもの社会性の発達において極めて重要な時期である。幼児期後期には、ほとんどの子どもが幼稚園または保育所に通うようになり、仲間同士の関係のなかで、遊び道具の取り合いなどの対人葛藤場面が生じる。この対人葛藤場面において、他者との効果的な相互交渉を行うために必要な社会的問題解決能力をどのように培っていくかが課題となる。

一方、乳幼児期の心理的問題として、愛着に関する問題、発達障害の問題があげられる。

愛着に関する問題では、主たる養育者との基本的信頼感が育っているかに注目することが重要である。子どもの応答性の乏しさ、困ったときに親を頼らない、一方で強い分離不安を示す等の傾向が見られる場合、不適切な養育や虐待の可能性が疑われることがある。幼児教育者には、こうした視点を持ち合わせながら、保育・教育を実践する力が求められている。

また、幼児教育者には、幼児期に顕在化する発達障害として、自閉症スペクトラム、注意欠陥多動性障害などについての深い知識と理解が必要である。さらに、発達障害の可能性があれば、早期から療育に取り組めるようサポートする体制の整備も同時に求められていると言えるだろう。

引用文献

- 藤井和枝 (1992). ことばの遅れを主訴とする発達遅滞児の指導：母子あそびをとりいれた指導 特殊教育学研究, 30 (3), 49-58.
- 五位塚和也・山田悠未・古賀 聡 (2018). 幼児の発達援助に関する視点に及ぼす臨床心理学的な知識と実践経験の影響 九州大学総合臨床心理研究, 8, 3-14.
- 本城秀次・幸 順子 (1992). ハイリスク児の発達援助 乳幼児精神医学の観点から 教育と医学, 40 (8), 708-714.
- 菊池哲平 (2002). ダウン症乳幼児に対する運動発達援助の意義と留意点 リハビリテーション心理学研究, 30, 41-54.
- 金城志麻 (2008). 幼児発達援助職を目指す学生に対して「子ども理解」を促す心理劇の試み 心理劇研究, 31 (1・2), 21-34.
- 久保由美子・長尾秀夫 (1996). 環境的リスク児の早期発見に関する研究：家庭環境要因を中心に 特殊教育学研究, 34 (3), 45-54.
- 文部科学省 (2017). 幼稚園教育要領<平成29年告示> フレーベル館
- 岡田洋子 (1987). 乳幼児の行動発達と発達援助 MCCベビーテストの再考察 保育研究, 8, 155-171.
- 大橋佳子 (1993). 吃音問題の本質をさぐる 吃音幼小児に対する発達支援の方法 聴能言語学研究, 10 (3), 211-218.
- 尾崎康子 (2005). 幼児期における自閉性症状に及ぼす母子支援の有効性：愛着形成と母子分離のプロセスからの検証 富山大学教育実践総合センター紀要, 6, 127-136.
- 杉田千鶴子・井出文子 (1984). 障害児の発達援助における相互作用的アプローチ：自閉的な幼児の遊戯過程の変化と家族ダイナミクス 佛教大学心理学研究所紀要, 2, 20-44.
- 海野 健 (1997). 幼児自閉症の「視線」発達および発達援助について ―精神発達児の視線発達との比較― 児童青年精神医学とその近接領域, 38 (3), 257-268.
- 山本洋子 (1992). 精神発達遅滞幼児への発達援助

—S子の事例を通して— 日本女子大学教育科学
の会人間研究, 28, 86-102.

横山武子 (1996). 遊びを通しての発達援助：誘い
水は「待つ」こと 情緒障害教育研究紀要, 15,
79-88.

遊佐千香子 (1991). 発達援助としての親子教室に
おける子どもの変化過程—厚木市でのとりくみ—
青山学院大学文学部紀要, 33, 117-130.

